

少年は捨てられた炭鉱を歩くのが好きだった。彼は何か具体的な目的があつてそこを歩くわけではない。蟻の巣のように張り巡らされた路を、ランプで足元を照らしてただただうろつくのだ。なんでもない石の中で輝く石を見つける瞬間が好きなのだ。いや、ただ歩き、偶然に見つけるその瞬間を彼は愛している。市場での価値がそう高くないものでも、美しさという価値基準は他の誰にも左右されなかった。

炭鉱に足を運ぶようになったきっかけは意地悪い者たちからの逃避だったが、今そこへ赴くのは前向きな理由だ。

炭鉱の存在を少年は父から教えられた。かつてそこを多くの者たちが掘り進め、石を採掘したのだと、父にとつての祖父もその一員で大きな宝石を見つけたのだと、めずらしく上機嫌だった父は自分のことではないのにまるで自分のことのように誇らしげに語った。

しかし、隆盛はもう半世紀以上も終わり、今そこを歩くのは少年のみだ。

たったひとつの足音は、炭鉱がさびしさを訴えているように聞こえた。

少年は夜光石を落としながら進む。だから、昨日と違う路を選ぶことに迷いはなかった。

「今日はこっちに行こう」

炭鉱を歩くのが好きだと言っても、彼がそうすることができるのは、当然、仕事の無い時間帯だけだった。彼は十三歳だったが、家族のために働いていた。父は盗賊に足を奪われていた。日本製の電波時計で時間を確認する。少年は足を止め、少しの迷いを持ちながら踵を返す。

「ん……？」

視界の隅で何かが光ったように見えた。そこ——路の端には石が積み重ねられていた。なんてことのない、当たり前前の様子。少年は迷わず、その石をよけた。

「……はは、誰かが隠して行つたんだな」

なんと、そこには両手で持って余りある大きさの、鮮やかで深い青色の希少鉱物があつた。ふつう、希少鉱物は埋もれている。地中に隠れている。つまり、誰かが隠してこの場を離れたのだとすぐにわかった。

少年はそれを持って行くことを悪いことだと思ふような価値観を持ち合わせてはいなかった。発掘者を長年待ち望んでいた鉱石は少年の手に収まった。

「……二千万で買おう」

離れた場所にある町の鉱石店にそれを持ちこむと、大してよく鑑定せずに鉱石商が言った。

「それでも安いだろ、きつと」

「ああ。だが、他の店に持っていけば殺されて奪われるだけだぞ」

鉱石商はそれからとある提案をした。支払いの他に、都市への移動手段とそこでの衣食住をある程度保障する、と言った。少年は家族を捨てる即断をし、それに飛びついた。

少年はすぐに用意された馬車に乗った。しかしその晩、少年は殺された。御者と鉱石商はグールだった。少年は一時の身軽さを得た代わりに、命と大金と希少鉱物を失った。